



上町台地に眠る幕末の志士たち ～土方歳三とお雪が逢瀬した坂道～

200以上もの寺社仏閣が集積する上町台地。大阪の歴史、ドラマ、物語の宝庫ですが、幕末の大坂を彩った志士たちも、やはり上町台地界隈で活躍しました。龍馬の隠れ寺や、新選組の旅館、司馬遼太郎『燃えよ剣』では土方歳三と恋人お雪の逢瀬のシーンにも登場する口縄坂などを巡ります！

① 石蔵屋跡(大和吉遭難の地)

慶応元年(1865)1月8日、石蔵屋(ぜんざい屋)に、谷三十郎指揮する新選組が浪士捕縛のために突入した。中にいたのは土佐系の浪士で、大坂の町に火をつけて、騒乱を起こそうという計画が事前に漏れた。突入したのが多くは外出中で、中にいた大和吉が斬られた(ぜんざい屋事件)。昭和になって、大和吉と共に石蔵屋に潜伏していた田中光顕(昭和まで存命)は、犠牲になった大和吉のために石碑を建立した。碑文には「大和吉は土佐藩の勤王の志士なり、此に潜匿中の処慶応元年正月八日、新撰組の兇刃に斃る。年二十四」とあり、辞世の歌が記されている。「ちりよりもかろき身なれど大君に ころばかりはけふ報ゆなり」新選組は京・大坂で数々の事件を起こしているが、石碑そのものに、「新撰組」と記されているのは珍しい。

② 土浦藩蔵屋敷跡

徳川譜代の常陸(茨城県)土浦藩9万5千石の大坂蔵屋敷がこの地にあった。天保9年(1838)、10代藩主・土屋寅直(とまなお)は大坂城代を務めた。寅直の父である彦直(よしなお)は、水戸徳川家から来た養子で、徳川斉昭とは従兄弟の間柄。大坂城代在任中に大坂湾へロシア船ディアナ号が現われた。領地は常陸以外に、和泉(大阪府)の一部や下総相馬郡などに飛地領があった。

③ 法性寺

日蓮宗のお寺で、維新時のオランダ人医師・ボードウインの宿舎となった。現在もガラスの菓子入れや、ボードウインの写真など遺品が残されている。ボードウインは浪華仮病院のお雇い医師で、負傷した大村益次郎や労咳だった小松帯刀の主治医であった。また、ここは薩摩藩御用商人薩摩屋半兵衛の菩提寺でもあり、その縁か、坂本龍馬が新選組に追われた際に、潜伏したという言い伝えが残されている。

④ 英国外交官アーネスト・サトウ 宿泊の地 法雲寺、本覚寺跡

アーネスト・サトウが初めて来坂したのは、慶応3年(1867)1月7日。来坂の目的は、將軍徳川慶喜が公使ハリー・パークスとの謁見を控え下見と大坂町民の観察だった。1月9日午後薩摩藩士・吉井幸輔(のちの友実)が、サトウの宿泊所・本覚寺を訪れた。11日には、再び吉井幸輔が小松帯刀を伴って本覚寺を訪ね、朝食を共に摂った。小松と吉井は、パテ・ド・フォアグラとビールが大いに気に入ったとサトウは書き残している。同年7月、3回目の来坂。パークス・慶喜との大坂城での謁見当日の早朝、7月27日、薩摩藩士・西郷吉之助が本覚寺にいるアーネスト・サトウを訪ね会談を行った。5回目の来坂は、慶応4年(1868)2月。本覚寺ではなく法雲寺に宿泊。この来坂中に「堺事件」が勃発している。

⑧ 島男也(おのや)旧居跡・川崎孫四郎 自刃の地(井伊大老暗殺、京畿拳兵計画)

島は元笠間藩士で、坐摩神社境内に道場を開いていた。桜田門外の変で、江戸と大坂の同時決起を計画した水戸浪士の川崎孫四郎や高橋多一郎、息子の莊左衛門ら同志は、島宅に集まっているところを町奉行所の役人に襲われた。川崎は自刃、島は捕縛され、江戸送りとなり、獄死した。事前に計画が漏れて、首謀者だった高橋は役人に追われ、四天王寺まで逃れた後に、息子とともに自刃した。四天王寺内に父子の墓がある。

⑨ 土佐藩ゆかりの寺 齡延寺

武市半平太(瑞山)の妻・富子の弟で武市半平太の義弟にあたる島村寿太郎(洲平)は、武市半平太が切腹する際、小笠原忠五郎とともに介錯人を命じられ、辛い役目を果たしている。戊辰の役では従軍し活躍するが、明治6年(1873)12月2日、大阪で死亡しこの寺に埋葬された。土佐藩刀工の左行秀(さのゆきひで)や、同藩郷士・安岡恒之進の墓所もある。安岡恒之進の従兄弟にあたる安岡嘉助は、武市半平太の密命により、大石因蔵、那須信吾の3人で土佐藩参政吉田東洋を暗殺している。

⑩ 源聖寺坂

源聖寺の近くにあるので、源聖寺坂という。江戸時代、この坂の中腹に「こんにやくの八兵衛」という祠があった。何でも、この八兵衛さんは狸だそうで、こんにやくを買ってこの前を通ると、八兵衛さんにこんにやくを取られることから、命名されたとのことだ。当時はこの辺り、狸が藪陰から出てくるほど、草深い場所だった。坂の石畳は大阪市電に敷かれていた石を再利用している。

⑪ 萬福寺(新選組旅宿跡)

萬福寺は西山浄土宗のお寺で、文禄3年(1594)前田利家の弟前田利信と僧開導によって開創された。慶応元年(1865)5月に將軍家茂の上洛に備えて、大坂の警備のため新選組は萬福寺、会津藩は一心寺に屯営を振り分けられる。新選組は谷三十郎以下、20人ばかりが本堂で寝起きしていたと伝わる。5月26日、尊攘派浪士と交流があったと疑われた藤井藍田が萬福寺に連行される。藤井は尋問に答えようとせず、押収書類から藤井の潜伏浪士との交遊関係を察知した隊士らは、これに激昂し、藤井を獄中で刺殺したものとされる。また、6月15日には新選組が警備するので、中止される予定だった天神祭を実施しないかと、大坂天満宮に持ちかけた。その返答を下寺町の「我等旅館」まで持ってくるようにと回状が回ってきて、下寺町まで届けたと、天満宮の宮司が日記に記している。

⑫ 口縄坂(くちなわざか)

口縄とは蛇のことを言う。この坂が、崖を蛇が這うような様子に見えたことから名づけられた。坂上に織田作之助の文学碑がある。この坂を登って左(北)側に西照庵という有名な料亭があった(現在、夕陽丘学園付近)。司馬遼太郎作『燃えよ剣』には、慶応4年(1868)1月、鳥羽伏見の戦いに敗れて、大坂に戻った土方歳三と、京から土方に会いに来た恋人お雪とが口縄坂を登り、西照庵で逢瀬を楽しむ…といったくだりが描かれている。

⑬ 稱念寺(しょうねんじ)

土佐海援隊の出身で外務大臣陸奥宗光とその家族の墓跡。陸奥の父、伊達宗広は鎌倉時代の歌人、藤原家隆を敬慕し、家隆の墓付近に隠居所「自在庵」を作り、この地を「夕日岡」と命名した。陸奥宗光は紀州藩を脱藩し、勝海舟の門下生となる。坂本龍馬率いる海援隊に入り、龍馬の片腕となった。陸奥は龍馬暗殺後、いろは丸事件の交渉で海援隊と衝突した紀州藩の三浦休太郎を暗殺犯と疑った。三浦が宿泊していた、京都西本願寺の東にあった天満屋を襲い、警護にあたった齋藤一・大石次郎ら新選組と海援隊が斬り合っている(天満屋事件)。薩摩藩家老小松帯刀は、慶応4年(1868)5月23日～7月12日、大阪府の知事代行(府事管理)や外国事務掛、総裁局顧問、外国官副知官事、玄蕃頭などの要職を歴任していたこともあり、「神戸事件」「堺事件」など外国との折衝に苦慮していた。明治3年(1870)、労咳を患っていた小松は、大阪で亡くなりこの近辺に葬られた。同郷の大久保利通や五代友厚がお墓参りに訪れている。明治9年(1876)、鹿児島島の「小松家墓所」に改葬された。陸奥宗光の父・伊達宗広は明治10年(1877)に亡くなり、遺言どおりこの地に埋葬され、陸奥家の墓所として、宗光や家族もここに葬られた。昭和28年(1953)、陸奥家の子孫の方が鎌倉に移葬した。

